先物協会ニュース

JCFIAマンスリー

JCFIA
JAPAN COMMODITY FUTURES INDUSTRY ASSOCIATION

発行　日本商品先物振興協会
〒103-0016
東京都中央区日本橋小網町9-9
TEL(03)3664-5731　FAX(03)3664-5733
http://www.jcfia.gr.jp/

私の好きな一文字

鈴木　明夫

（鈴木　明夫　第一商品社長）

FUTURES PLAZA

再編の潮流に向けて

エース交易
総合企画部係長　**小笠原　奨**

先日、TV報道を見ながら「無秩序状態」という言葉を連想する機会がありました。これは国家・政府レベルでのみ発生し得る現象ではなく、ミクロの分野でも当然見られる問題だと思っています。統制のきかなくなった状態とは本質が異なるので、例えとしては妥当性を欠くかもしれませんが、身の回りでは近年のFX取引で、ある意味、これに類似した状態を見たような気がしました。

被害の拡大による訴訟件数の急増は、否定のしようもなく商品先物取引業界に対し強いマイナスイメージをもたらしています。無秩序、法的不備、行政上の制度欠陥に加えて、個々の取引員が臨む営業姿勢の問題とも重なり、当業界に対する社会イメージに及ぶことは避けられません。こうした社会批判に危機感を覚えたのは私を含め、決して少数の関係者だけではないはずです。

私たちの本丸である商品先物は来年以降、一層激しい競争時代を迎えます。自由裁量とリスクが併存する中、生き残りに向けて自立的な行動が求められる業界再編の新しい流れがスタートするのだと考えています。現在のような〝業界図〟は維持できない可能性が高いでしょう。理想論としては信用力を持つ企業が再編の中で優位性を保つことができるはずです。

全社的な規模で経営戦略を練り直し、明確なビジョンを標榜することで不安を払拭し、社員はその方針を理解した上で「秩序」のもと営業活動を行い、一体化して幕開けに取り組んでいく必要があるのだと思います。そして、個人としては社の基盤としての自覚を持ち、組織に対する影響力を自主的に備えていくとともに、自身の実務・理論武装を怠らないことが今後の局面において非常に重要な要素だと考えています。

劇的な〝チェンジ〟に伴う様々な問題とそれを克服する適応力がいま求められていることは間違いありません。信用力を念頭に置きながら、業界を取り巻く逆風を払拭させるようなイメージ戦略の見直しもまた緊急課題となっています。

【プロフィール】
1967年長野県生まれ。1990年エース交易入社。1999年より現職。

関東地区

第27回大学・商取就職セミナー

採用と教育、大きな努力

46大学、50取引員、216名参加

毎年、3、000人前後の大学新卒者が就職する商品先物取引業界。その定着率の低さが常に問題視される中で、大学と商品取引員との間の就職活動の掛橋になっている関東地区商品取引員人事部会（長谷川武会長＝カネツ商事総務部部長）主催、当協会後援の第27回大学・商取就職セミナーが10月26日、東京・中央大学駿河台記念館で開かれた。27年間続いてきたこの集まりで、前年に続いての討論会形式（会場からも討議参加）をとり、46大学61名（前回比2大学増）、商品取引員50社111名、報道機関22社37名、5つの関係団体等から7名、合計216名が参加、本音と本音をぶつける白熱の討論を展開した。

熱心に討論を聞く

やめたい時もあった

第1部では、来春の内定者（女子）、入社3年目の支店営業主任、同5年目の本店営業課長代理に、志望動機や仕事の現場の様子など人事部会の阿部厚司副会長（エース交易）が聞いた。

女子内定者は、総合職を目指して、金融会社・商社を希望して就職活動したが、その分野では総合職が少なく、結局、規模は小さくても納得ができる説明を受けた商品取引員に決めたという経緯を述べた。同時に、この日の先輩のたのもしい話を聞いて、目標を高くもって仕事していきたい――と今後の抱負を語っていた。

入社3年目の主任は、入社時の人事の担当者の話しと現実のギャップを感じたことや、マニュアル通りに積み上げてできることではない営業の難しさ、顧客が損失を出した時の落ち込み、部下指導の悩みを語りつつ、直接の上司がしっかりと体ごと受け止めてくれたことで乗り切れたと説明した。途中、やめようと思ったこともあったという。

新しくスタートしたセクションで8人の部下を持つ入社5年目の課長代理は、無我夢中で頑張ってきたといい、いつか一国一城の主になるのを目指している。だが、数字が上がらないのは自分の責任だと、精神的にまいって何度かやめようと思ったこともあると振り返った。それでも実力主義が気に入っているようだ。

情報交換で解決法探る

信用情報産業として大きく変貌する商品先物取引業界の実態を理解してもらうための第2部の討論会は、青山学院大学の土橋正法学部長をコーディネーターとして、パネラーは、全国私立大学就職指導研究会・小平孝雄会長（東海大学就職部次長）、同・土橋久忠副会長（山梨学院大学就職キャリアセンター課長）、専修大学就職部・石田龍夫課長、当協会・佐藤陽紀副会長（ハーベストフューチャーズ社長）、時事通信社・長澤孝昭解説員、長谷川武会長の6名。

就職指導研究会の小平会長は、ここしかないとの気持で就職したのに2～3カ月でやめる若者気質とフリーターの増加、また、就職内定後の家庭訪問の大切さを語り、顧客のために役立っていると実感できる業界になってほしいことなどの要望も述べた。

同研究会の土橋副会長は、企業のリストラの一段落、景気上向きで求人増に向かっていることと、求人活動・内定が早すぎるのは好ましくないことを解説しつつ、商品取引員が採用者をどう育てるかの考え方の明示や、やめた時にも大学に報告するなどの相互理解の努力を求めた。

専修大学の石田課長は、同大学のデータでみて、この20年間で就職希望者の就職決定率および卒業者の就職率がいずれも8割台から7割台へ、さらには5～6年前から6割台に落ちていると指摘した。

こうした中で、過去5年間で同大学から商品先物業界に就職した229名のうち170名が既にやめているのは採用に問題があるのではないかと提起した。そのうえで、ぜひ大学の就職部を訪ねて下さい、いいことも悪いことも出しあって定着率の低さを解決する方法を探りましょうと訴えた。

ピンチをチャンスに

当協会の佐藤副会長は、ここ3～4年、経済環境の厳しさに対応して、しっかりした考えを持つ若者が増えてきているとして、それを迎え入れる業界の変化も解説した。

まず、2005年5月施行予定の改正商品取引所法の特長について、取引所への取引証拠金の直接預託、委託者保護基金の設立で委託者債権の保全が万全になったことと、勧誘時の行為規制で、余裕資金と知識のある人にしか市場参加を要請しないことや、しつこく、迷惑な再勧誘が禁止されることを丁寧に説明した。

また、来年1月からの委託手数料自由化によって、顧客満足度を競うサービス競争、外国為替証拠金取引、商品ファンドの組成・販売、証券仲介業務など品ぞろえが充実、顧客が顧客を呼んでくるような時期が来ると予測した。

さらに商品先物は、ものすごく専門的な仕事で、成果をあげるには相当な覚悟が必要で、ごまかしが効かないと述べ、これからが大変革の時ととらえ、ピンチをチャンスにするように努力を積み重ねると強調した。

長澤解説員は、少子化が進む中での人材確保の難しさを述べ、長谷川人事部会長は、毎年変わっていく学生の価値観への対応の難しさを話しつつ、社内教育の徹底を約束した。

話の輪が広がる情報交換会

先物春秋

「ケインズはよく賭をした。そのためにモンテ・カルロでは旅費までなくし、友人のバッシー夫人から金を借りたこともある。チャーチルとも二〇ポンドの賭をした」（伊東光晴著『ケインズ』）。後の20世紀を代表する経済学者と英国の宰相が賭けをしたのは1929年5月のことだが、英国人の賭好きを象徴する話だ▼ロイド・ジョージ率いる自由党の勝敗を巡って賭け、選挙結果は自由党が惨敗、チャーチルの胸ポケットから大枚20ポンドがケインズの手に渡った。ケインズの愛弟子ハロッドはうれしそうにこう記す。「わが主人公の選挙結果に関する予想が、チャーチル氏のそれより一層正確であったことを記録しておくことは興味あることであろう」（『ケインズ伝』塩野谷九十九訳）▼しかし、自由党の敗北で株式相場が下落し、160ポンド損をしたのにはケインズもがっくりだった。一方、賭に負けたチャーチルはアメリカに講演旅行に出掛け、講演で稼いだ金を元手に、米国訪問を実り多いものにしようと、信用取引で株を買う。時あたかも、10月24日、歴史に名高い「暗黒の木曜日」のことだ▼ウォール街を散策していたチャーチルは株式取引所に入り、歴史的瞬間を目撃する。これはチャンセラーの『バブルの歴史』に出てくる一挿話だが、チャーチルの懐勘定にまでは触れていない。恐らくは失敗に終わったに違いないが、チャーチルはケインズも顔負けの投機大好き人間であった。秋深く相場も荒れる季節がやってきた。（泉）